

## 実践女子大学図書館蔵 下田歌子自筆日記について（四）

明治二十四年前半の概要

愛甲 晴美

## はじめに

本稿は、実践女子大学図書館所蔵の下田歌子自筆日記についての調査報告である。今回は明治二十四年（下田歌子関係資料 請求番号三三）一月から十二月のうち六月までを取り上げる。六月までの概要を一覧で示し、主要な出来事についての解説を加える。日記は共紙表紙に「明治廿四年一月ヨリ／日記／香雪」と記されている。

本資料は第二丁、第十丁に錯簡があり、正しくは第二丁は第九丁と第十丁の間、第十丁は第十五丁と十六丁の間にあるべきである。錯簡について、上部余白に別人による鉛筆書きの記載がある。

明治二十四年一月に帝国議会議事堂仮議事堂の焼失、二月に

内大臣三条実美の死去、五月には来日中のロシア皇太子への暗殺未遂事件（大津事件）が発生した。

特に大津事件については華族女学校および下田歌子（以下下田）の関わりを日記から検証する。

なお、以下文中引用文、参考文献等については、旧字体を新字体に直して表記したところがある。

## 1. 明治二十四年一月から六月の概要

下田の日記の記述をもとに、明治二十四年一月から六月の動向を一覧にした。

日記には記載がないが下田に関係している事項、および補足説

明は（ ）で示した。

月	日	主要事項
一	十二	学校始業
	十三	風邪にて平臥（十九日まで日記を休む）
	二十	議事堂（帝国議会議事堂仮議事堂）全焼する
	二十三	インフルエンザ流行のため、本日より一週間学校休業
二	二	昨日より腹痛で平臥
	十一	紀元節 学校にて奉祝の式典を挙げる
	十五	弘道会女子部の会に出席
	十六	腹痛下痢で欠勤、平臥
	十八	内大臣三条（実美）死去
	二十五	故三条公国葬につき休校
	二十七	風邪で平臥（三月四日まで）
三	七	牧野（峰子）昨日男子出産の喜びにゆく
	十九	常宮（昌子内親王）午後（華族女学校）来訪
	二十一	華族女学校で開かれた女子教育会に出席
	二十七	皇后華族女学校行啓
四	一	本日より春季休業、自宅で一種物合を催す
	二	汽車で塾生一同、小田原にある野村氏の別荘で二泊する
五		弘道会女子部に出席する

月	日	主要事項
六	六	北白川宮別邸、本所へ御召しにより行く
	九	昨日より風邪で平臥
	十一	松方（正義）宅に寓する芳川某の向島の別荘によし子、塾生九人とともに行く
	二十四	生徒一同を引率して濱離宮を参観する
	三十	三島通良氏来訪、よし子の診察を依頼する
五	五	牧野氏（の初節句）に招かれて行く
	九	野村氏の勧めで新富座へ行く
	十一	北白川宮邸へ御召しにより行く、大津事件の一報を受ける
	十二	天皇、ロシア皇太子慰問のため京都へ出発する
	十三	ロシア皇太子の慰問の相談を受ける、高崎夫人（貞子）死去
	十四	（華族女学校）西村校長慰問のため京都へ出発、新橋に見送りに行く
	十七	高崎夫人の葬儀に出席、体調不良（五月二十日頃まで）
	二十五	頭痛、急性胃カタルに罹る
六	十	関根氏の招きで歌舞伎座に行く
	十一	高崎（貞子）五十日祭に招かれて行く
	二十八	腸胃カタルに罹る、よし子も同じ

一月一日は父録蔵、(堀江)よし子(以下よし子)ほか数名と早朝より鎌倉へ初詣に出かけた。虫損のため、場所の詳細は特定できないが、午後六時には帰宅し、学校の試験改正案などを調べている。この試験改正案は、同月五日にも記載があり、その後、三月十八日に改正された。改正内容は、これまで毎学期の終わりに定期試験を行い、平常試験と二分して学期成績を定め、学年成績は三学期の成績を通約していたものを、学期末の定期試験を廃し、平常点のみでその学期の成績を定めると変更された。この改正は過度の勉強で体を壊すおそれがあるためだった。

この頃、巷ではインフルエンザが大流行していた。よし子も二日から高熱を発していたが、同月八日には「インフルエンザ益流行」の文字が見え、十三日には、下田自身が「風邪にて平臥」とあり、高熱で苦しんでいる様子がうかがえる。日記も十四日から十九日まで付けられない状態であった。二十三日から一週間は華族女学校もインフルエンザ流行のため「学校休業」とある。

新聞にもインフルエンザ流行に関する記事が頻繁に見られ、病名について「インフルエンザ」名からして舶来の病氣又、府下に流行し出しぬ(中略)初め此病氣の流行りし折余程名を附くるに困まり終にインフルエンザとは名づけぬ我邦にてハ之を流行感冒とも亦電光感冒とも訳す其流行の烈げしきを云ふなり此ハインフリューエンス(勢力、威得)より出づと(東京日

日新聞 明治二十四年一月十七日)と、巷説を紹介する記事もある。明治天皇の侍講、宮中顧問官、枢密顧問官を歴任し前年発布された教育勅語の草案を作成した元田永孚、内大臣三条実美もこの年、インフルエンザにより死去しており、下田の日記にも、訃報を受けたことが記されている。

同月十九日から二十日にかけての深夜、麹町区内幸町にあった帝国議会議事堂仮議事堂が全焼した。この火災に言及した資料は多数あるが、『東京市史稿』が当時の当直職員らの聞き取りも含め、詳細に記録している。出火が確認されたのは未明の十二時半過ぎで、漏電により政府委員室の電気灯から発火し、電線を通じて各室へ広がったものと結論づけている。木造の仮議事堂は衆議院・貴族院とも焼失した。

二十日の日記には「今晚議事堂全焼す」と記されている。帝国議会は会期中であったため、貴族院議場は華族会館(後に帝国ホテル)、衆議院議場は東京女学館に場所を移して行われた。

二月十五日、下田は「(日本)弘道会女子部の会へ出席す」と記している。日本弘道会は華族女学校長西村茂樹が、明治九年に東京修身学社の名称で創設した道徳団体で、明治二十年に日本弘道会と改称された。明治二十三年四月、牛尾田絢子(棚橋絢子)、平尾光子の尽力により初めて女子部の会合(婦人会)が開かれ、以降男子部は奇数月、女子部は偶数月に、定集会および常集会の

名称で開くこととし、会では講演が行われた。

同会の会報誌である『日本弘道會叢記 貳編 第三冊』（明治二十四年三月発行）の「本會記事」には、二月十八日午後二時より華族女学校内で、婦人部集會が開かれたこと、副會長南摩綱紀および竹内公友、佐方鎮子<sup>しんし</sup>の講演内容の概略に続き、「此日會スル者高橋平尾下田三女史其他ハ女流會員ノ熱心家ニシテ會員外ノ婦女子モ多ク傍聴セリ」と下田の出席も記されている。理由は定かでないが日記と雑誌で集會日にずれがある。

日記で初めて同会への出席が確認できるのは、明治二十三年十月十九日（日記では婦人弘道會）である。『日本弘道會叢記 初編 第拾四冊』（明治二十三年十一月発行）の本會記事の欄に、出席者として「學監下田歌子」の名が見え、日記の記載を裏付ける。同誌の「入會之部」に下田歌子の名があり、この時点で會員となったことがわかる。同入會者欄には高崎正風、木村サダ（貞）子、嘉悦孝子などの名も見える。その後は明治二十四年四月五日にも出席しており、いずれも会場は華族女学校であった。

二月十八日、午後八時頃本省より下田に三条実美の容態について通達があった。容態の内容部分は虫害で判読できないが、知らせを受け午後十時三十分には三条邸を訪れた。しかし、すでに亡くなっており、日記には「実に邦家の爲めに痛歎に堪へず」と悲し

みを述べている。二十五日には護国寺において国葬が執り行われ、華族女学校も休校となった。

下田は二十七日の夜から風邪で体調を崩し、なかなか回復せず、三月五日まだ全快しないながら漸く出勤している。

三月六日、牧野伸顕夫人の峰子（三島通庸<sup>みちのり</sup>二女）が男児（長男伸通<sup>のぶみち</sup>）を出産し、翌七日にその祝いに訪れた。峰子は下田の教え子で、大変親しい間柄であった。五月五日の初節句にも招かれ、訪問したことが日記に記されている。

同月十九日午後、常宮昌子内親王が華族女学校を視察した。明治二十一年生まれの常宮はこの時まで満三歳に満たない。日記には御養育主任佐々木高行夫妻と園子爵<sup>きこう</sup>が供奉したとある。

同二十七日には皇后の行啓があった。日記には詳しい内容は記載されていないが、行啓は午前九時二十分から午後三時三十分まで長時間に及んだ。初等小学から高等中学まで各教場を視察し、生徒の唱歌や箏洋琴の演奏を聴き、校長職員生徒に賜物があつた。下田は「白なゝこ意足」を賜っている。

四月一日より華族女学校は春季休業にはいった。この日は桃天塾<sup>ひょうてんしゆく</sup>で一種物合<sup>ひとものあひあひ</sup>を催している。華族女学校教員、生徒ら総勢七十余人が会したとあることから、賑やかな会であつたと想像できる。

同月二日は、午前十一時四十分の汽車で塾生一同と小田原にある野村（靖）氏の別荘へ行き、一泊したとある。鯛網引きや松露



図1 三島通良肖像（部分）  
大正10年4月21日撮影  
（実践女子大学下田歌子研究所蔵）

採りを楽しみ、夕刻より八幡山の花見にも出かけている。枢密顧問官や外交官、大臣を歴任した子爵野村靖の長女久子は萬里小路正秀夫人（後に外交官本野一郎夫人）で、久子の談話筆記によれば、下田の最も早い時期の教え子であった。華族女学校では明治二十二年の最初の本科卒業生の一人であり、卒業後も親しい関係が続いていた。下田の日記によれば久子は明治二十三年八月に女兒を出産し、下田が名付け親になっている。明治二十四年の日記には、五月初め頃から、詳しい事情は明らかでないが、久子や父野村と下田が行き来する様子がうかがえる。

四月三十日、三島通良（日記の表記は三島）が来訪し、下田はよし子の診察を依頼した。三島通良（一八六六一一九二五）は帝

国大学医科大学（現東京大学医学部）卒業後、同大学院で小兒科を専攻し、明治二十四年文部省の学校衛生事項取調嘱託に着任した。全国各地の学校衛生状況を調査し、日本に於ける学校衛生学の先駆者として活躍した人物である。また、大学院在学中の明治二十二年に著した育児書『ははのつとめ』親の巻・子の巻は、翌年には美子皇后へ献上され、版を重ねて華族女学校等公私立女学校の教科書としても使用された。

下田も三島の存在は知っていたと推測されるが、現在確認できる日記で、三島本人と確認できる最初の記録はこの三十日である（下田と親しい関係にある三島通庸とその家族も「三島」の表記で頻繁に現れるため、姓だけの記載で個人を特定できない場合もあるが、四月三十日は「三島通良氏」の記載がある）。日記によれば、前日の二十九日にも三島が来訪したが会ってはいない。学校教育の場に積極的な関わりを持ち始めた時期でもあることから、来訪の本来の目的が往診であったのか、あるいは学校衛生に関することであったかは定かではないが、これ以降特に五月は、よし子のみならず父録蔵も下田自身も頻繁に往診してもらっていることがわかる。この頃、次項でふれる大津事件が発生し、下田の周辺も混乱していたようで、体調を崩す要因となっていた可能性もあり、医師として頼り、三島もそれに応えて多忙な中でも往診を引き受けていたのではと推測される。

三島は以後も華族女学校の学校衛生に関わり、医学博士三宅秀<sup>みやけひいず</sup>、華族女学校教員の佐野安、愛知信元、北条亮らとともに生徒用の椅子、机の改良に取り組み、明治三十年から三十一年にかけて、東京工業学校（現東京工業大学）に委嘱して生徒の年齢に応じた机椅子を製作し、学校に導入させた。<sup>10</sup>

図2の肖像写真は、三島通良の娘で、大正六年実践女学校高等女学部家政専攻科卒業生の二三子氏の遺品をご親族よりご寄贈いただいたものであり、父通良から受け継いだものとのことである。この写真が贈られた経緯は明らかでないが、三島がのちに娘の教育を下田に託したことは、自らも学校衛生の面から助力した下田の女子教育への確かな信頼を表しているといえよう。

（写真裏面の明治二十四年が正しければ、下田の年齢は数えて三十七か八歳である。写真師武林は武林盛一（一八四二—一九〇八）で、明治十七年から麹町一番町十一番地に武林写真館を開業している。）

五月十三日、高崎正風の妻貞子が死去した。日記には午後八時に歿したとあり、「実に驚き入りたり。あゝ。」とその訃報に動揺する様子がうかがえる。高崎正風は下田の和歌の師であり、宮中出仕を推挙した恩人であり、また岩村からの上京時に平尾一家が一時寄留するなど、家族ぐるみでごく親しい関係にあった。明治



図2 「下田歌子肖像写真」 明治24年  
（実践女子大学図書館下田歌子関係資料 4935）



図3 図2裏面

二十二年三月には下田の教え子であった長女胤子<sup>たねこ</sup>が亡くなったおり、高崎は短い間に妻子を亡くす不幸に見舞われている<sup>11</sup>。下田は



十七日の葬儀に参列したが、帰宅途中で気分が悪くなり、帰宅しても具合が悪く三島の診察を受けている。その後もしばらく体調不良が続いている。五月二十五日には頭痛と急性胃カタル(胃炎)で平臥とあり、六月六日まで日記も止めている。

六月十日は、華族女学校教授の関根正直の招きで、歌舞伎座に行っている。この日の演目は「春日局」「幡随長兵衛」の二幕で、大変評判がよく連日売り切れの盛況だったようだ。日記には「関根氏の招きもだし難くて」とあり、評判の舞台を是非にと誘われたのであろう。<sup>12)</sup>

その後、同二十八日の日記にはまた「腸胃かたる」の文字が見え、よし子も同じ症状で体調が悪くならない様子がうかがえる。

## 2. 大津事件について

五月十一日、訪日中のロシア皇太子ニコライが大津において、警備中の巡查津田三蔵によって右頭部を切りつけられ負傷するという暗殺未遂事件が発生した。

日記にはこの事件当時の状況が記されている。次に原文および翻字をあげる。

### 凡例

- 一 旧字体は新字体に改めて表記した。
- 一 句読点はできる限り原文通り表記した。
- 一 翻字は山口典子氏による翻字原稿を参照し、愛甲が作成した。

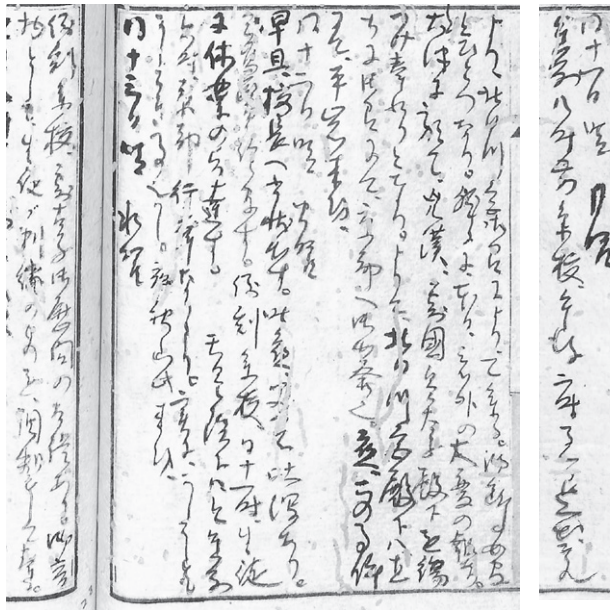


図4 本文第二十二丁表、裏 第二十三丁表

(翻字)

(五月)

同十一日 晴 月曜

午前八時前参校、午後二時過退出、それ

より、北白川宮御召により、て参る。御所の女官

とひとつなり。然るに、本日、意外の大変の報あり。

大津に於て、兇漢、露国皇太子殿下を傷

つけ奉れりとなり。よりて、北白川宮殿下ハ直

ちに御召にて、京都へ御出発也。夜、この事件

にて、平岩来訪、

同十二日 晴 火曜

早旦、校長へ書状だす。昨夜、父君吐瀉あり。

三崋医診察す。例刻参校、同十一時、生徒

に休業の旨達す。天皇陛下ハ今午前

六時、京都行幸なりたり、実に、かしこしとも

かしこき事也かし。夜秋山氏来訪、

同十三日 晴 水曜

例刻参校、露太子御慰問の相談あり。御音

物として、生徒が刺繍のものを、調製して奉る。

(後略)

下田は事件発生当日の五月十一日、午後二時に学校を退出し、北白川宮に召されて同邸を訪れた。ニコライ皇太子の訪日に対しては国賓待遇として、旅行日程にあわせての歓迎行事が予定準備されていた。何事もなければ、五月二十三日には北白川宮が夜会を催し、饗応する予定にもなっていた。<sup>13</sup>

接伴委員長の有栖川宮威仁親王は五月四日に最初の到着地である長崎で出迎え、その後も同行していた。ニコライ一行は鹿児島神戸、京都を回り、十一日に大津入りした。滋賀県庁を訪れ、午後一時半頃県庁を出て、京都へ帰るため人力車を連ねて沿道を行進中、事件は起きた。ニコライは右頭部二箇所に傷を負ったが幸い命に別状はなく、応急処置をしてひとまず県庁へ戻った。事件は滋賀県知事から内大臣、宮内大臣へ直ちに報告された。また、威仁親王は天皇に宛てた電報で、まず天皇からニコライに見舞いの電報を出し、すぐに京都へ見舞いのために行幸してほしいと伝えた。<sup>14</sup>

急報は北白川宮邸にも届き、天皇の下令により、北白川宮能久親王は天皇の名代として医学博士高木兼寛、同池田謙斎とともに、午後四時四十五分発の列車で京都へ向かっている。下田が北白川宮邸を訪れた直後のことで、日記にもその様子が記されている。

夜この事件について、華族女学校書記の平岩扶佐吉が下田を訪



ねて来ているが、翌十二日は学校が臨時休校となったので、そうした事務的な相談だったとも考えられる。

十二日早朝、天皇は特別列車で京都に向け出発し、夜には直接ニコライを慰問した。

この事件は、次期皇帝に対しての暗殺未遂事件であつたため、大國ロシアが事件の代償として領土の割譲など強引な要求をしてくることや、戦争状態になることすら想定され、日本国中を震撼させ、政府内も大混乱となった。

天皇自らが他国の皇太子を慰問することは前代未聞のことで、下田の日記にもあるように、天皇の行為に対して畏れ多いと感じる国民感情も加わり、日本全国から慰問や見舞いの品が殺到する事態となった。

下田に対しても慰問のための相談があり、華族女学校生徒が刺繍したものを調べて贈り物として準備したと記されている。十四日に西村茂樹校長はこの見舞いの品を持つて京都に向かうが、下田は新橋駅に校長を見送りに行っている。

西村校長の慰問については『華族女学校第六年報』に次のように記録されている。

五月十四日露國皇太子殿下御負傷ニ付御見舞トシテ西村校長  
本校職員生徒一同ニ代リ京都ニ至リテ生徒ノ兼テ製作シタル

御椅褥五枚各種織物ニ縫製シタル 御膝掛壹枚縫製シタル 左ノ書面ヲ捧呈セリ

日本國華族女学校々長職員生徒一同謹みて我か崇敬する  
露國皇太子殿下に白す

殿下ハ我か帝室の親愛するところ臣民の尊重するところなるに圖らずも御厄難に遭ハセ給へるにより我か

皇帝皇后兩陛下には驚き痛みおぼしめされ我等臣民はた愕き畏まり奉る爰に本校生徒等が平素つくりおけるものを獻して聊 殿下の御心を慰め併せて尊體の速に常にかへらせ給はんことを祈りまつる

明治二十四年五月十三日

慰問品については、当時の新聞にも次のように取り上げられている。(讀賣新聞 明治二十四年五月十七日…原本のふりがなは筆者が一部省略した)

華族女学校の御見舞物 同校より露國皇太子殿下の御見舞として奉獻せし物の様子を聞くに同校生徒が平常課業として製する縫繡物を急に御椅褥五枚と御膝掛一枚とに調製せしものにて其地質ハ悉く日本の織物を用ひ周囲の裝飾なども総角のふさを垂れ染色の上品なる模様の優美なるあッぱれ本邦の美術を代表する程の物にして(以下略)

華族女学校からの見舞いの品は、生徒が授業で製作した刺繍品をクッションと膝掛けに作り直したものだつたようだが、相談を受けたのが校長の出発の前日であり、おそらく大急ぎで仕上げたのであろう。下田自身が作業したという記述はないが、十三日の日記の最後には「三島医来訪、余も肩の料治を依頼す。」とあつて、一連の疲労で肩が痛んだ様子もうかがえる。下田の素早い対応によって、華族女学校も面目を保ったといえよう。

来日に際しての歓迎ぶりや手厚い接待に満足を感じていたニコライは、事件に対してはショックを受けたものの、命に別状がなかったこともあつて、日本への悪感情は抱かなかつたと伝える。また、天皇自らの慰問も功を奏し、日本国中からの夥しい慰問や見舞い品は日本国民の誠意と受け取られて、予定を切り上げて日本を離れる際に、ニコライはそうした一連の行為に対し謝意を示して本国へ帰還した。

また、その後の経緯として大審院長児島惟謙は、犯人津田三蔵に対して大逆罪として死刑に処すべきとする政府の圧力に反発し、五月二十七日の大審院法廷において無期徒刑（無期懲役）の判決が下されたことは夙に知られるところである。

## おわりに

明治二十四年五月に発生した大津事件は、日本国中を不安に陥れ、政府も対応に苦慮した。明治天皇によるニコライ皇太子への慰問や、天皇、皇后から本国ロシア皇帝、皇后への親書で見舞いの意を表し、それに触発される形で朝野をあげての慰問、見舞いが続いたが、学校関係者も慰問や電報、休校など対応に迫られた。その中でも、華族女学校は下田の機転で見事な見舞い品を用意し、西村校長も無事慰問を果たした。日記の一連の記述は、この歴史的事件がもたらした緊迫感を伝える貴重な資料といえよう。

一月から六月の間も、日々の面会、訪問は多く、忙しい様子うかがえる。個々の出来事に対しての記述は短いながら親しい人の死に際しては感情が垣間見られ、精神的にも肉体的にも無理をしていたからか、体調を崩しがちで寝込んでしまうことも多かった。

その中でも、下田の女子教育にも深い関わりを持つ三島通良の名が記されていることは注目に値する。今後も調査を続け、下田の動向を明らかにしていきたい。

今回の調査にあたり、三島通良の曾孫にあたられる東京工業大学学長三島良直氏より本研究所に、あらたに三島二三子氏のご遺

品をはじめ、下田及び本学に関係する多くの資料をご寄贈いただきました。また、夫人の真弓氏にはお忙しい中お時間をいただき、多くのご教示を賜りました。宮内庁宮内公文書館には資料閲覧等のご協力をいただきました。心よりお礼申し上げます。

## ■注

- 1 『女子学習院五十年史』 女子学習院 一九三五年 二三三頁
- 2 学校休業については日記による（『華族女学校第六年報』（明治二十三年九月〜二十四年八月）の行啓其他記事に学校休業の記録は掲載されていない）。
- 3 『東京市史稿市街篇』 第八十一 東京都 一九九〇年 一〜二九頁  
日記では二月十九日が虫損のため休校の記載は不明だが、同二十五日には「故三条公御国葬に付休校」とある。『華族女学校第六年報』では「同（二）月十九日内大臣三条公爵薨去ニ付三日間授業ヲ休ム」とある。
- 5 園子爵は生母園祥子の父基祥（もとやす）のことであろうか（ただし基祥は伯爵）。
- 6 同注2 五九〜六〇頁

- 7 『女性と文化』下田歌子研究所年報 第三号 二〇一七年 拙稿注1

- 8 『下田歌子先生伝』故下田校長先生伝記編纂所編 一九四三年 一八五〜一八六頁

本野久子に関しては、本学文学部美学美術史学科教授児島薫氏の「桃天塾卒業生、本野久子について」実践女子大学文学部紀要第四十八集二〇〇六年によって、すでに詳細な調査研究がなされている。

- 9 同注7 一二三頁
- 10 同注8 二七四〜二七六頁

- 11 『女性と文化』下田歌子研究所年報 第二号 二〇一六年 拙稿 一〇四頁

- 12 『歌舞伎座百年史』本文篇上巻 松竹株式会社 一九九三年

- 13 『大津事件 ロシア皇太子大津遭難』（大津事件参考文献）

参照

- 14 『幸啓録 五 明治二十四年』露國皇太子殿下御訪問ノ爲京都へ行幸ノ件 宮内庁宮内公文書館所蔵

## ■大津事件参考文献

- 保田孝一 『最後のロシア皇帝ニコライ二世の日記 増補』朝日新聞社 一九九〇年

- 尾佐竹猛 三谷太一郎校注『大津事件 ロシア皇太子大津遭難』岩波書店 一九九二年

児島惟謙 家長三郎編注『大津事件日誌』平凡社 一九七一年  
林董 由井正臣校注『後は昔の記他 林董回顧録』平凡社 一九

七〇年

(あいこう・はるみ／実践女子大学下田歌子研究所研究員)